

『第 7 回地域に飛び出す公務員を応援する首長連合サミット in 北海道』

【首長連合代表挨拶 鳥取県知事 平井伸治】

今回、私たちは初めて本州から外に出て、ここ北海道東神楽町の素晴らしいロケーションの中、首長連合サミットを開催させていただいた。従来の縛られた公務員の姿ではなくて、外に飛び出していく、地域の中で活躍する。そんな姿を私たちのこのムーブメントの中から作り上げていければと思う。全国各地、今日ここに集った皆さんこそ、本当の意味の、地域を良くする、真の公務員像なのだろうと信じて止まない。私たち首長は、皆様の応援団としてやっていく覚悟。サミットを通じて、多くを学び、多くの友人を得ていただき、これからの人生を楽しく、かつ有意義なものにしていきたい。

【開催地首長挨拶 北海道東神楽町長 山本進】

全国各地から大勢の皆様がお越しいただいたことに、心から歓迎を申し上げたい。思えば私も、この首長連合が始まった時には役場職員だった。今は応援する立場としてサミットに参加させていただいている。サミットでは、本当に熱い思いを持って活動している皆さんが、自分の実践例を話し、今後どうしていったらいいのか、そんな思いを語り合っている。今回は役場職員が大勢ボランティアで入り、地域の関係団体、様々な企業にもご協賛をいただきながら、サミットを開催させていただいた。この二日間、議論を交わしたりしながら、この雪を溶かすぐらいのエネルギーで盛り上げていただきたい。

【地域に飛び出す公務員ネットワーク代表（首長連合提唱者）挨拶

一般財団法人 地域活性化センター 理事長 椎川忍】

「公務員である以前に私達は地域住民である。地域を支えなきゃいけない。」との思いで、地域づくりに携わっている公務員が本当に多い。不祥事があるとバッシングされるのが公務員だが、地道な活動をしている人達に光を当てたい、公務員がつながることによって日本の社会も少し変わっていくのではないかという期待を持って、平成 20 年に地域に飛び出す公務員ネットワークを立ち上げた。2 年経った時、役所の風土、雰囲気を変えていかないとこういう人達が活動しづらいということで、首長さん方をお願いして、この首長連合が設立された。これまでに 7 回のサミットが開催されたが、毎回、どうしたらもっと良くなるか、もっと応援できるかを議論していただき、本当にありがたい。それを支える公務員スタッフの皆さん、日常的に活動されている公務員の皆さん。これは本当に尊い活動なので、ぜひ続けていただきたい。住民のかたは、頑張っている公務員を大いに応援していただきたい。地域を盛り上げ、共に良い地域を作ろうではありませんか。

【首長＆公務員 飛び出す甲子園 2017】

司会（北海道東神楽町長 山本進）：

全国で 330 万人の様々な立場の公務員が、熱い思いを持って地域に飛び出す活動をしている。このような活動を更に後押しするために、この「首長 & 公務員 飛び出す甲子園 2017」を企画した。全国から公募した先進的な取り組みをしている 3 つの自治体が発表を行う。首長と飛び公でタッグを組み、そのユニークさ・先進性・共感を競う。会場の皆様にもそれぞれ最終的な評価をしていただく。

こちらの考えたお題に沿って、1 団体 10 分間のプレゼンテーションをお願いする。コメンテーターは、地域活性化センターの椎川理事長、鳥取県の平井知事、更には飛び公最初のアワード受賞者であり、今は釧路市議会議員の大越さん。

【飛び出す甲子園プレゼン① 奈良県生駒市】

「本業は消防士、地域活動では少年サッカー指導者」

奈良県生駒市長 小紫雅史：

首長さんの中では僕が多分一番若輩者なのに、僕だけネクタイしていないという。のっけからやらかしまして、もう怖いものは何もないという感じでございますので、開き直って頑張りたいと思っています。

それでは、今日の主役、吉尾君が一番力を入れて頑張っていることをまず、皆にドーンと言ってください。

生駒市 消防本部 吉尾大輔：

えー、副業です。

生駒市長 小紫：

いやいや、副業って言っちゃったら今日の話がえらいことになるので、本業を頑張ってもらわなあかんのですけども。彼は本業もすごく頑張ってくれています。副業というか、地域では今どんな活動をやっているのですか？

生駒市職員 吉尾：

今現在、僕は市内の小学生を対象に少年サッカーの指導者として活動しております。

生駒市長 小紫：

本業もすごく活躍ということで、例えばどんなことを？

生駒市職員 吉尾：

奈良県代表として、全国消防長会主催の意見発表会で優秀賞をいただきました。また、救助技術指導会という大会でも、奈良県代表として東近畿大会に何度か出場させていただいています。

生駒市長 小紫：

救助の大会にあたって肉体改造もしたとか？

生駒市職員 吉尾：

そうですね。私が出場している大会の種目がパワー系の種目というか、人を引っ張り上げるという種目なので、入庁当時より 10kg ほど体重を増やして頑張っております。

生駒市長 小紫：

半年前会った時は全然違う体型だったのが、こんな風になってきたので僕もびっくりしました。実は僕も市長になって肉体改造しているんですよ。毛髪量 10%減。白髪量 10%増。あとは体脂肪率 10%増。トリプルテンなんですけどね。ちょっと、やっちゃいけない肉体改造をやっているんですけど（笑）。

「地域活動でプラスになったことは？」

生駒市職員 吉尾：

小学生相手にサッカーの指導をするのですが、大人と違って語彙能力がないので、できるだけ小学生の子供にも分かり易く説明するようにしています。そのことが仕事においても、コミュニケーションを取る上でとても役に立っていると思います。

生駒市長 小紫：

分かり易く表現できるというのはとても大切なこと。地域活動を通して良い経験をしているのではないかと思います。逆に、地域活動をしていく中で苦労していることや大変だと思うことはないですか？

生駒市職員 吉尾：

サッカーの指導で、自分も体を動かすこともありますし、肉体的にしんどいと思うことはあります。私は消防署職員として市民を守るんですけど、この市民というのは一体誰なのかと考えたときに、サッカーを教えている子供達であったりその親御さんであったりする。そういった顔が見える関係というのは、仕事をするにあたってすごくモチベーションが上がりますし、良い影響を与えてくれていると思います。

「副業規定で “ダイバーシティ生駒”を目指す」

生駒市長 小紫：

働き方改革や副業という話が官民間問わずいろいろ議論されていますが、サッカーのコーチはお金を貰っているんですか？

生駒市職員 吉尾：

はい。生駒市では公務員が副業してもいいですよということになったので、申請をしてお金を頂いている状態です。それまではずっとボランティアで活動させていただきました。

生駒市長 小紫：

同じようなことをやっている他のコーチは給料やお金を貰ってやっているわけでしょう？

生駒市職員 吉尾：

そうですね。私も学生時代からアルバイトとしてサッカーのコーチをしていたのですが、その当時はお金を貰っていましたが、他のコーチもちろん貰っていました。ただ、公務員になるということで、公務員は副業はいけない、なら貰わないでおこうということで、ボランティアでずっとやらせてもらっていました。僕個人の判断としまして、ボランティアにした方が胸を張ってできると考えたからです。

生駒市長 小紫：

他の人は同じことやってお金もらっている。片や、学生の時もらってたのに、急にお金が貰えなくなる。ちょっと不思議なことかもしれないですね。とは言いつつ、生駒市では全国のとても素敵な面白い取り組みをしている公務員の方に講師をお願いするのですが、「交通費だけでいいです」という方も多い。でも、やっぱり来ていただく我々も、交通費プラスアルファで、ちゃんと謝礼を出す必要がある。講師をするには準備の時間もあつるし、その分、本業も忙しく濃密にやらなければいけないので、僕はその対価を貰ってもいいんじゃないかと思うんですね。

生駒市に副業規定ができてから、サッカーのコーチをする時に気持ちの持ちようというか、行動が変わったことなどはありますか？

生駒市職員 吉尾：

お金を頂いているということに関しては責任感を持たなければいけないと思います。

生駒市長 小紫：

副業規定によって、何か今までと大きく変わるということはないです。逆に言えば、今までお金を頂いていても良かったと思うのをより明確化しただけ。

先ほど鳥取県の平井知事から働き方改革という話がありました。「ワークライフバランス頑張るぞ！」は、今では時代遅れ。ワークライフコミュニティバランス。ワーク・ライフ・コミュニティ、この3つがある町こそが素晴らしい町ではないかなと思っております。

生駒市は住宅都市で、ベッドタウンと言われていました。これからは、多様化・いろんな人がいる町ダイバーシティ。DiversityのSをCにして、多様化する町 DiverCity。非常に多様化する市ということでダイバーシティ生駒を目指したいと思います。ここにおられる皆さん、パクっていただいても構いませんよ（笑）。

生駒市の小紫と —

生駒市職員 吉尾：

吉尾大輔でした。

生駒市長 小紫：

どうもありがとうございました。

司会（東神楽町長 山本進）：

お二人のおしゃべりを聞いていて、これが市長かというご意見と、さすが市長という声があると思う。多分、この後の飛騨市 都竹市長には強くプレッシャーがかかっているんじゃないかと思います。

【飛び出す甲子園プレゼン② 岐阜県飛騨市】

「雪匠組の活動 雪祭りで婚活イベント」

岐阜県飛騨市長 飛騨市長 都竹淳也：

今日は、岐阜県飛騨市長の都竹と、飛騨市役所の吉川慶君、そして山下譲太君の 3 人でお話させていただきます。

岐阜県飛騨市は、岐阜県の一番北、富山との県境の町。人口 24,700、13 年前に二町二村が合併した。この二人は昔の村役場の出身。吉川君は旧河合村、山下君は旧宮川村、それぞれ人口は 1,000 人を切った。

私が地域の行事に出ると、必ず市の職員がいる。それも市の職員としてではなく、ごく一人の地域住民としてそこに参加している。吉川君は雪匠組という活動を頑張ってくれています。

飛騨市 企画部 地域振興課 吉川慶：

私が住んでいる旧河合村は、ここまったく一緒。豪雪地帯で、降雪量は、年間で 8～9m。非常に重く湿った雪が降ります。昔は雪というのは厄介者でしたが、旧河合村の施策として、雪を使って元気にしようということで、約 30 年前、我々の父親の世代から冬に雪祭りを始めました。約 10 年前に世代交代があり、父親世代から我々若者世代へバトンタッチを受けました。

私が役場に入った当時は、役場職員＝団体の会計や庶務をやるのが当たり前。雪匠組という若者グループは、代表が私の同級生、私は一住民として代表を影で支えながらやっています。昨年からは、単なる雪祭りじゃ面白くないということで、地元の小さなスキー場を貸し切って、婚活イベントをやってみました。一昨年と昨年と 2 回開催。2 回で合計 14 組が参加して、9 組のカップルが誕生し、そのうち 3 組が結婚しました。

飛騨市長 都竹：

雪匠組は雪の像を作っているんだよね。

飛驒市職員 吉川：

はい。雪祭りで、子どもたちに受けるものということで、その年の流行り物やキャラクターを作ります。何を作るか毎年頭を抱えますが、私自身も楽しみながらやっています。

飛驒市長 都竹：

ネタバレするから、フェイスブックに絶対写真を載せるなって言われるんだよね。

「伝統芸能の保存 北辰若連中」

飛驒市長 都竹：

じゃあ次は譲太。彼は北辰若連中という活動をやっています。

飛驒市 総務部 税務課 山下譲太：

私の活動を一言でいうと、伝統芸能の保存。私の地区は高齢化率 50%。6 人で獅子舞をやっていて、うち 3 人が 65 歳以上。隣の地区や真向いの地区でも、「もう来年は駄目だ駄目だ」と、まったく同じことを言っていた。だったら、その地区皆で集まって、僕ら若い奴らがどの地区の獅子舞もできるようにしようってことで、立ち上げたのが北辰若連中という組織。地元のお年寄りの方に大好評。人口が大体 100 人のところ、80 人位の方が毎年それを楽しみに会場に集まってくれる。去年は市長も来ていただき、非常に喜んでいただけた。

去年からは、もうやらなくなってしまった地区の獅子舞の復活も始めた。今年は、3 戸しかない集落で、30 年ぶり位に獅子舞を復活して、非常に喜んでもらった。このような活動を楽しくやらせていただいている。またこれからも新しい事をしていけたらなと考えています。

飛驒市長 都竹：

獅子舞の復活って本当にすごくて、僕も見に行ったら滅茶苦茶感激した。伝統芸能って、どこも廃っていく。そして続かなくなっていくけど、「よし、やってやろう」と言って復活させてしまうって、すごいエネルギーだなと思います！ ああいうエネルギーってどこから湧いてくるの？

飛驒市職員 山下：

いや、単純に集まって飲むのが好きなのかなあ。話をしていたら、みんな獅子舞が大好きだから、じゃあやろうっていうように、自然になっていったかな。

飛驒市長 都竹：

飲みたかったんだね。

飛驒市職員 山下：

まあそうですね。不純ですけど。

飛騨市長 都竹：

吉川君も飲みたいというのが結構ウエイトを占めてる？

飛騨市職員 吉川：

はい、もちろんそうです。やっぱりイベントの先にはご褒美となる飲み会があり、飲み会の先に新たな出会いがあって、婚活イベントで男女がくっついたと。やはり飲み会はコミュニケーション。飲みニケーション、飲み会を大事にしると市長から常々言われているので、飲み会は人と人をつ結び付ける大事な仕掛けかなと思います。

「皆が元気になる活動を自然にやっていける町を作りたい」

飛騨市長 都竹：

雪匠組の話の中で、30 年前に雪祭りを始めたというのがありましたけれど、今やっている連中は、自分達の子供に自分の背中を見せたいという思いがある。その話がすごく感動するんだけど。

飛騨市職員 吉川：

そうですね。私達も子供の頃から父親の背中を見て、そのイベントを作り上げる父親の背中が非常に格好良いなと思って育ちました。今度は僕らが背中を見せる番だなということを念頭に置きながらイベントをやっています。

飛騨市長 都竹：

こういった活動というのは、誰も特別な活動だと思っていない。しかも市役所の中には、同じようにやっている人達が沢山いる。だから僕は、皆に言っているんだけど、お互いに見に行って「良い事やっているね。すごいね。素晴らしいね」と言ってやるだけでいいんだと伝えています。活動していて、何が一番モチベーションが上がりますか？

飛騨市職員 山下：

やっぱり住んでいる所が元気になることが良い事だなと思います。

飛騨市職員 吉川：

市長さんは「今だけ・ここだけ・あなただけ」ということで、常々僕ら職員に言われます。今だけだよ、ここだけだよ、あなただけだよという市長のフレーズをいつも頭に入れてながら毎日楽しく過ごしています。

飛騨市長 都竹：

とにかくこういった活動によって町が元気になって、皆が喜んで笑ってくれるということが、僕らのモチベーションになっています。こういう自然な活動を自然にやってもらえる町を作っていきたいと思っています。どうもありがとうございました。

司会（東神楽町長 山本）：

どうもありがとうございました。会場の皆様には、最後に「この3つの自治体の中で、どこが1番良かったか？」を挙手していただきます。その数が多い事、コメンテーターの皆様には持ち点5点のなかで配点をしていただき、優勝を決めていきたい。それでは、プレッシャーの中、最後の南陽市さん、よろしくお願いいたします。

【飛び出す甲子園プレゼン③ 山形県南陽市】

「官民協働、庁内横断プロジェクト “ラーメン課”」

山形県南陽市長 南陽市長 白岩孝夫：

素晴らしい熱意のこもった発表の後ですが、我々座って発表させていただきます。今日我々が発表するのは「南陽市役所ラーメン課の取り組み」について。今日は参加首長の皆さんの分のラーメンマップ、持ってきました。他の方の分はないので、是非南陽市に来てこれを手に取って頂ければありがたい。札幌市の北海道経済センター、その5階に山形県の観光物産情報センターが入っている。そちらにも置いてあるので、是非ご覧頂ければと思う。

ラーメンは全国で食べられていると思いますが、実は、人口あたりのラーメン店舗数が1番多いのは山形県。1番少ないのは大阪府、人口10万人あたり13.49軒。全国で2番目に多いのが栃木県、10万人あたり51.86軒。山形県が何軒かと言うと、10万人あたり70.92軒です。ラーメンでできてるんですね、山形県。それで、私達の市にいくつあるかというと、60弱あります。南陽市は人口3万2000人なので、10万人あたりに換算すると150～160軒という、無茶苦茶な軒数がありまして、如何にラーメンを食べているかという事です。

南陽市役所ラーメン課というのは、市民の皆さんと職員協働でやっているのですけれども、庁内横断的なプロジェクト方式を取っているのですよね。

南陽市 総務課 江口美和：

はい。担当課を固定せずに、職員も担当課の職員ではなくて、庁内からラーメンの好きな、意欲のある人を会員として募って、様々な職場の職員が協力して事業を進めています。

南陽市長 白岩：

ラーメン課長というのも存在していて、本当の役職で言うと、みらい戦略課という企画財政課に相当する所の係長をやっている。その係長が太ってきてちょうど良かったので、ラーメン課長に任命しました。これ、職員だ

けじゃなくて、市民の皆さんと一緒にやっているのという所も特徴ですね。

南陽市職員 江口：

広く一般の方からも会員を公募して、ラーメン課会議というオープンの話し合いの場を設けています。官の下に補完的に民をぶら下げるという形式はよくありますが、官民協働でプロジェクトを進めるという点が、ラーメン課の特徴だと思います。

「山形県ではラーメンが“おもてなし”」

南陽市長 白岩：

飛び出して行かないと、市民の皆さんがどういう風に考えているか感じているかわからない。我々このラーメンマップを作るに当たって、当市の中に 50 数軒もラーメン店があるとわかった次第。これちょっと恥ずかしかったなと。改めて、地域を歩いて見て、取材して作ったのですけれども、取材する人は本当に大変だった。短期間で期限がある中で、ラーメン店を毎日毎日歩いた。東北芸術工科大学の学生さんとも一緒に取材をした。その学生さんの中には南陽市出身の方もいて、自分の町にこんなにお店があったんだっていうのを、職員と学生さんが一緒に気づけた。そういう地域資源の再発見であるとか、我々の所にこんなに美味しいラーメン屋さんがあったんだっていう、誇りを作り上げるといった効果もあるのではないのでしょうか？

南陽市職員 江口：

はい・・・。

南陽市長 白岩：

今、笑われちゃいました。

(会場笑い)

南陽市職員 江口：

市長があまりにもラーメンの事について熱く語るものですから（笑）。実は、市長はラーメン課の主事補なのです。市長の名刺にもラーメン課主事補と入っています。その裏面はもちろんラーメンの写真。その名刺を作ってと言われた時には、私の立場からは「どうなんだろう？」と思いました。「山形県ではラーメンがおもてなし」。お客さんが来ると、お寿司とかお蕎麦ではなくて、ラーメンの出前を取っておもてなしというのを、よく聞いた事があるかと思います。あれ本当なんです。

南陽市長 白岩：

それ全国的に違ってたと言われた時、びっくりしましたよね。

南陽市職員 江口：

びっくりしました。確かに、私も週 1,2 回はラーメン食べます。今日の市長とのランチもラーメンでした。（笑）

南陽市長 白岩：

旭川ラーメン食べてきました。

「ラーメン課が今後の南陽市職員にもたらすものとは」

南陽市職員 江口：

このラーメンマップを見ると、南陽市にこんなにラーメン屋さんがあるとは知らなかったです。ますます南陽市のラーメンがおいしいとか誇れるとかっていう、これからのシビックガイドの構成が図られていくと、プロジェクトとして感じ入る所であります。

南陽市長 白岩：

市民の皆さんがラーメンっていう面でも、我々の市には誇れる面があると、職員と一緒に再認識したという点もあります。それでは、このラーメン課が今後の南陽市役所の職員にもたらすものは何でしょうか？

南陽市職員 江口：

はい。プロジェクトを作って 1 年が経ったわけですが、今年びっくりする事に、クールビズで私達にポロシャツが配られたんです。それは、こういう。（ポロシャツを見せる）

南陽市長 白岩：

ラーメン課って書いてあります。

南陽市職員 江口：

プロジェクトのポロシャツを一齐に着て、毎週金曜日に業務を行いました。目が点になりました。お客様も目が点で「ここラーメン屋さん？」みたいな雰囲気になって。でも、これを着る事によって、ラーメン課員でない職員も、こういうまだ掘り出していない地域の資源が、南陽市にはあるんじゃないかと考えるきっかけができたのではないかなと、感じております。

南陽市長 白岩：

こういう取り組みをきっかけにして、改めて、地域で我々が誇れるものを職員と市民と一緒に掘り出す、そういうきっかけになればと思っております。ありがとうございました。

コメンテーター（一般財団法人地域活性化センター理事長 椎川）：

三事例どれも甲乙つけがたい。会場の皆さんは一つしか手を挙げられないので大変。

生駒市さんの例は、今の時流に合っている。大企業でも副業を認める企業は増えて来た。時代に合ったテーマ。それを軽いノリで、笑いを交えてやって頂いたのは大変良かった。

飛騨市さんの例。ややもすると、大きい事は良い事だということだけが強調される。政府もそれを強調して合併を進めた。しかし、小さい事の方が良い事だということが世の中には沢山ある。合併は行政体制としては大きいことはいいことだを選択したのだから、施策としては小さい事は良い事だということを追求しなければいけない。この例はその典型で、地域のコミュニティを守り、伝統文化を維持継承していく活動を一生懸命やっておられる。それを首長が後押ししているというのは素晴らしい。

南陽市さんの発表は、上り調子でだんだん面白くなった。市長が入れ込んでこの問題をやっている。また、現場をちゃんと歩いてやっておられるというのは素晴らしい。私の大好きな地域おこしの要素が全部入っている。それは、地域資源を見直す、現場主義、域学連携の三つ。

司会（東神楽町長 山本）：

会場の皆さんから質問を受け付けたい。

三重県庁 山路：

首長はこういう場を通して活動を PR をしていると思うが、職場の仲間とか直属の上司の方のご反応は如何か。「本業はどうなっているんだ」といった事が付きまとうが、生の声を聞かせていただきたい。

生駒市職員 吉尾：

私の上司も、副業の申請をしている。外に飛び出して、いろんな活動をする事に関しては、すごく背中を押してくれている。周りの職員は、「ああ、そんな事やってんのや」ぐらいの感じ。

飛騨市職員 山下：

業務には支障を来していないので、上司の方、課長係長以上共に「良い事やってるね」という感じで、背中をすごく押してくれている。

飛騨市職員 吉川：

私の職場も同様。職場の人間も結構地域でいろんなボランティア活動をやっているんで、僕は普通。僕と山下君だけではないので、非常にやりやすい。市長がこういう変わった方で、どんどんやれと後押しをする。そういった雰囲気職場にある。

南陽市職員 江口：

ラーメンは食事。食事をしている時に、会員がラーメンを撮って SNS に上げるので、「ああ上げてるんだな」と思ってたさっている。後押しして頂いていると思っている。

司会（東神楽町長 山本）：

3市の中でどこが1番良かったのか、会場の皆様には挙手によって投票していただきたい。1人1回で、1点。コメンテーターの皆様がそれぞれ5点をお持ちなので、その5点を配点いただく中で、どこが1番良かったかを決める。投票の前に、コメンテーターの皆様から講評をいただきたい。

コメンテーター（釧路市議会議員 大越拓也）：

本当に甲乙付けがたい。学校の先生が仕方なく部活動の指導をやっていて、学校の先生の働き方改革をどうするという話もある。生駒市さんは、全市で取り組むっていうのを、首長さん自ら発信しているのはありがたい。公務員全体に対して、今後いろいろ展開を仕掛けていけるんじゃないかという意味で素晴らしいと思った。

飛騨市さんは、2人ともすごいと思った。僕も地域活動始めたのが飲みニケーションから。嫌々やってたが、その後の一杯が楽しみで、愚痴をこぼしながら、次、子供達のためにどうやって企画を展開するかみたいな話をして、どんどん楽しくなった。酒の席の方がアイデアも出て来て、子供達のためにと言ったのが、自分達が楽しくなれば良いという風に、どんどん発展した。

伝統芸能の継承は、そこまでくると本当にすごい。失った物を復活させるとか、身近なものから守っていこうとする姿というのはすごいと思った。

南陽市さんは、首長自ら発信して取り組んでいるというのは素晴らしい。僕も最初名刺頂いた時になんじゃこれと思った。ラーメン課ってなんだろう。そんな部署が本当にあるのかと思ったら、主事補って僕の頂いた名刺にも書いてあった。首長自らが牽引していると言っても過言ではないと思う。

コメンテーター（鳥取県知事 平井伸治）：

本当に楽しくて中身のある発表ばかりで感激した。本当に甲乙付けがたい。

小紫市長の解説もあったが、吉尾さんがしっかりと頑張られておられる様子も良く伝わって来た。

大切なキーワード「コミュニケーションが育つ」と吉尾さんがおっしゃった。

消防は特殊な職場で、外に出る機会がありそうでない。あった時には火を消しに行くか、救助に行くか。そういう時に身命を賭けて出かけて行くのが消防。相手の顔が見える関係にある事が、自分の仕事に影響するという言葉が、非常に琴線に響いた。

都道府県は教員を抱えるが、部活動などの子供達の活動をどうやって支えるかが非常に難しい。

鳥取県では外部コーチの導入を積極的にやっており、吉尾さんもそういう形に近いと思うが、そうすると、子どもはものすごく伸びる。教員の負担は部活動にあると言われているから、そういう意味でも非常に助かる。消防士あるいは自衛隊の方は、いろいろと特技もあるのでそこをもっと使えば良いと思う。鳥取県は、職員として雇って、それで派遣するというやり方をしているが、多分限界がある。だから、副業を正面から考えた方が良いというのは、非常に参考になる実践例だ。

飛騨市は非常に雪深い所。雪は、最初はきれいだが、だんだん邪魔になって来る。住みやすい事の要素に、雪との関わりはある。そこも、実践例を出し、さらには嫁さんまで連れて来る。3組も結婚できるっていうのは、なかなか山間では難しい事で、とんでもない偉業をされたと思った。

また、伝統芸能の獅子舞などは、神社によって微妙にやり方が違う。それを全部舞えるようにしようというのは、発想の転換。これも大変ユニークで、素晴らしい。

飲み会の話もあったが、「お神酒に上がらぬ神はなし」という文化がこの国に根付いており、それを飛騨でもしっかりと守り、良い町作りに繋がっていると思った。

南陽市長の白岩さんも最初名刺をもらってびっくりしたが、今日じっくりと解説を聞いて、ますますびっくりした。ラーメンっていうのは、一杯にかける情熱とか、技があって、それぞれのお店で作り込んでいる物。リッチでもあり庶民的でもありっていう意味で入りやすい。

家内もラーメン好き。鳥取市に県庁があるが、名店と言われるラーメン店の数は多くない。西の町、米子はラーメンが美味しい。最近中部の倉吉などでは牛骨ラーメンができた。だから家内は「県庁を移すべきだ」と言う。そのくらいラーメンは大切なのかなと思ったので、吉村山形県知事には、南陽市に県庁を移すようアドバイスしたい（笑）市役所を挙げてムーブメントを起こし、本当にみんな楽しんで SNS だとか、ポロシャツを着て仕事をしている様子が目に浮かんだ。どれも甲乙付けがたい発表だった。

司会（東神楽町長 山本）：

集計の結果も固まったので、事務局から発表をしていただく。

事務局（鳥取県庁 岩谷）：

飛騨市さんが 50 点で、1 番点が多かった。続いて、南陽市さんが 33 点。生駒市さんが 17 点という結果。

司会（東神楽町長 山本）：

優勝が飛騨市さん。準優勝が南陽市さん。そして、準々優勝が生駒市さん。表彰式は交流会で行う。以上をもって、首長&公務員飛び出す甲子園 2017 を終了する。

【 首長サミット（首長会議） 】

進行（鳥取県知事 平井伸治）：

先ほど、生駒市、飛騨市、そして南陽市のすばらしい実例に触れ、大変参考になった。やっていること、私たちが共有したいこと、すべきこと、それらをテーブルの上に出して、今後について語り合う形で進めさせていただく。

まず事務局から、副業のあり方の状況について調査した結果を報告していただく。

施策調査報告（佐賀県小城市 坂田）：

地域に飛び出す公務員を応援する施策調査の結果報告を行う。この調査は、首長連合加盟自治体の「地域に飛び出す公務員を応援する施策」を取りまとめ、情報共有することで、応援する良い施策が

効果的に広がっていくことを期待して実施しており、今回で 7 回目の調査である。

今回の調査のテーマは、公務員の副業について。生駒市が今年、公共性のある組織での副業促進を目的に、そのような報酬を得て従事する際の許可基準を定められたことでも話題となった。首長連合に加盟されている 62 自治体のうち、47 の自治体から回答いただいた。今回は、首長ご自身のお考えがより明確となる調査になったと感じている。

公務員は、国家公務員法、地方公務員法、それぞれで任命権者の許可を受けない限り、営利を目的とする私企業を営む事業に従事することが禁止されている。そのため、それぞれの自治体で許可に関する規則が設けられている。今回の調査はさらに一步踏み込み、生駒市や神戸市で取り組まれている公共性のある組織での副業促進を目的とした許可基準を設けているか、職員から許可の申請があった時に迷った事例はあるか、職員の副業についての首長のお考えを伺った。

公共性のある組織での副業に関する特別な許可基準がある自治体は、生駒市のみだった。ない自治体は 23、ないが今ある基準で許可できると考えると答えた自治体は 20。長野県は、ないが導入を検討しているとの回答だった。

許可に迷った事例として、まちづくり分野の NPO 法人に所属し、無報酬で活動している事例。無報酬だから副業ではないという位置づけで、兼業には当たらないという整理にされたということ。また、報酬を得て、山岳遭難発生時の救助に関する業務や、登山道の安全確保業務に従事することを許可したという事例もあった。

続いて、職員の副業に関する首長ご自身の考えについて。

副業賛成派は、応援する。現場の住民目線による行政の推進につながる。視野が広がり、人脈も増え、行政サービスも向上する。規制ではなく両立について考えていきたい、など。

反対派は、地域おこしのためであっても利害関係が必ず発生する。全体奉仕者としての役目を果たすために職務専念義務・守秘義務・信用失墜行為の禁止の根本基準は堅持する。報酬を得て活動することについては慎重に検討、などがあった。

検討したい派は、国や他自治体の状況を注視したい、研究していきたい、などがあった。中には、副業禁止の言葉が先行し、活動参加自体をためらう職員もいる。職員の地域活動への積極的参加を促し、また、地域の方に周知し、依頼してもらいやすい雰囲気作りという点からも、生駒市の取り組みは意義がある、とのご意見もあった。

最後に、生駒市から許可基準に関する資料をいただいたので、添付した。

鳥取県知事 平井：

事務局から丁寧なご説明をいただいた。それではまず、小紫市長から制度の説明を。今回、点数ないので（笑）

奈良県生駒市長 小紫雅史：

我々としては会心の漫才の票が伸びなかった。その傷がまだ癒えないのに 6 分間説明をするのかと。傷に塩を塗られるような感じ（笑）

働き方改革の中でサイボウズさんやロート製薬さんの副業の話が出た中で、生駒市に光を当てていただいており、非常にありがたい。

我々は、副業の規定を作ることが目玉だと思っていたわけではなく、地域に飛び出す公務員をどんどん増やそう、という中の1つのポイントとしてやっている。

先程の吉尾君の話にもあったが、公務員になったら、人と同じことをしてもお金もらったらあかんという、どこの地域もそういうのがある。そういう雰囲気、職員が頑張っている団体さんとかスポーツチームとかに、「公務員でも、他の人と同じように頑張ったらお金もらってええねんで」ということを分かっていたく1つの節目にしたいと考えている。

先程の施策調査結果にもあった。基準はないけど、現行の基準で許可できると考えている。これは非常に健全だと思う。僕も「作っても作らんでもええかな」とも思ったが、考え方の転換をアピールしたいと思って作ることにした。

具体的に説明すると、運用に関する規定の「対象となる活動」。「公益性が高く継続的に行う地域貢献活動であって報酬を伴うもの」「生駒市の発展、活性化に寄与する活動であること」。

「一般職の職員、在職3年以上」「人事評価の職員行動評価、目標達成評価がB以上」としている。

審査基準。「勤務時間外の活動であり、本業の遂行に支障きたすほどではない」「地方公務員法33条の、信用失墜行為の発生の恐れが無い」「特別な利害関係がない」「地域貢献活動として許容できる範囲であること」。

次の点は議論がある。「生駒市内における活動である」「生駒市の発展・活性化に寄与する活動であること」。前向きで元気な職員から、「私は大阪ですごいがんばってんねん。なぜ大阪だったらダメなのか。その経験が生駒市役所の職員として、すごくプラスになっている」と言われ、それはその通りだと思う。ただ、人事課と僕の攻防もあり、まずはこういう形でスタートして、いずれ生駒市内の活動とか、3年目以降とか、この辺は取っ払いたいと思っている。そんな意味で、基準を作る善し悪しはある。

副業と言うと「お金儲けかよ」と思うかもしれないが、「お金もらってもいいよな」というぐらいの活動している職員が結構いて、今回申請が上がってきたのは、彼と……それ以外はスポーツ関係のコーチというのが4名ぐらいある。関西一円で子供たちのダンスコンテストをやるようなNPOでガンガンやっている職員もいる。やはり頑張った人がそれに対する対価をしっかりともらえる社会にならなければならない。地域に飛び出す活動が、ボランティア精神に過度に依存して成り立つ、というのは健全ではない。

生駒市内でも賛否両論あるが、いろいろご意見いただき、あくまでも目的は、地域に飛び出すということで、一つの切り口としてご意見いただき、またそれを生駒市でも反映したい。

鳥取県知事 平井：

小紫市長、先にこの話をしておけば優勝した。先に漫才やるから……（笑）

素晴らしい内容で、私も聴きながら、「ああそうだな」ということがいろいろあった。それぞれの首長さんで、ご意見とか、自分のところの実例も含めまして。どうぞ。

宮崎県木城町長 半渡英俊：

うちの町は、中山間地域なので、飛び出す活動はごく当たり前。私もそうだが、職員の半数以上、無報酬、ボランティアの形でやっている。

私も NPO 法人の副理事長は無報酬でやっていた。だから、お金をもらう事は、いかがなのかと思う。ただ、生駒市でこういった基準を作られた。私たちには無いので、これを参考にして、勉強させていただきたい。

私どもは公務員なので、「公務員たるものはどうだ」ちゅう事はしっかり押さえたうえで、個人的には無償ボランティアをやっていただければいいと思っている。ただ、そういうことも踏まえて、一昨年から地域担当職員制度を設け、時間外対応で地域に飛び出せとした。

愛知県大府市長 岡村秀人：

大府市の場合、古くからの町がそのまま現在まで発展してきたので、これまでは地元で生まれて、地元の学校へ行って、地元の役場へ勤めてという人が結構多かった。最近は、結構市外から来ており、サラリーマン化してきていると感じている。これまでは、地域で地域の役職に就くのが当たり前だったが、そういうのも薄れてきたので、この首長会議に参加をしている。

職員に、「地域に飛び出していく活動を積極的にやろう」と言う手前、ライオンズクラブに加入したり、地域の民謡保存会に加入し、パレードに参加したり、自分の住んでいるコミュニティに入って、花植え活動に参加したりしている。

副業の問題だが、お金をもらって活動している職員、これは許可を取ってやっていただく。例えば、他の大学とか他の自治体での講師の講演料、地元の自治会の役員報酬。

気になるのは、この「副業」という言葉。ワザ、要するに「業」。新聞報道ではすべて「副業」になるが、最近有償ボランティアという考え方があるので、それもあっていい。

「ボランティアばかり一生懸命やって、もうちょっと仕事もしっかりやってよ」という懸念もある。生駒市さんが行動評価の基準を設けているのも、大変理解できる。この例を参考に、帰って考えたい。

山形県南陽市長 白岩孝夫：

南陽市には小説を書いている職員がいる。この職員は、所属長の許可を得て、職務時間外に執筆活動をしている。

私は、『公務員が公務として対価を得る以外のものを得てはいけない』ということは悪平等だと思う。働き方に気を配るという、組織としての注意点は当然守らなきゃいけないが、中には、仕事をちゃんとやった上で、その他に、自分の能力を発揮したい、そして、その気力も体力も十分にある人がいて、例えば 1 日 3 時間眠れば、あとはずっと働けるという人は、自発的な意思に基づいて、仕事もきっちりやる上に、社会的な意義のある仕事もする。そういうチャンスを失わせているのではないかという気もしている。そういう意味で、生駒市長が制度として作られた、というのは非常に先進的なことだと感じている。

北海道釧路市長 蝦名大也：

「営利」って何なんだろう、というもひとつあると思う。生駒市さんのを見ても、対象となる活動、公共性が高くの一文、また地域の発展、活性化。これが「営利目的」なのか。つまり、営利という言葉、副業という言葉はどう位置づけるか、ということになると思っている。

生駒市長の話のように、私も町の中のいろんな所に行くと、職員が活動しているのを沢山見る。特にスポーツ関係のいろんな行事に行くと、会長が市のOBだったり、そこで手伝っているのが市の職員だったり。自分も学生時代までスポーツをやり、自分も楽しみながら、そういった団体の活動も積極的に行っている。こういった活動で報酬が発生した時、『営利』にして良いのか、という思いがある。

だから、「副業」「営利」をどう整理したらいいだろうか？ 私企業の活動をバックアップすると、「どうかな」というものがあるかもしれないが、地域のいろんな分野の中で、NPO でもいいが、そこで必要な活動はどうしたらいいのか。

そういった意味で、この規則は、課題というか、非常に大きな問題提起を頂いた。

私個人としては、副業って言ったら、営利もあるかもしれないが、地域の活動に参加して、そこでの謝礼は主たる商売じゃないから問題ないと思っているが、現行の釧路市ではダメである。

鳥取県知事 平井：

法的な問題をスキップして話をしているが、「営利性があるかどうか」「事業として該当するかどうか」という議論はあり得る。

執筆活動の話があったが、執筆に伴って出て来る報酬、原稿料は、解釈上外しているのもあると思う。どこまで厳格にやるかという線引きは、一度整理しなければいけない。

田舎だと、ほぼすべての人が農家をそれなりの報酬でやっている。中には大々的に、本業と同じくらい収入があったりする。それが、なぜNPOの役員やスポーツ団体だったらダメなのかとか。そこは解釈で云々できる部分がある。それは今日以降の問題として整理をさせていただく必要がある。事務局でも考えてもらってもいい課題だ。

生駒市長 小紫：

副業規定を作るにあたって私も調べたが、農業収入、不動産、賃貸での収入は、多分どの自治体でもほぼ認めていると思う。「何で？」と思う。NPO法人はダメで、農業とか不動産賃貸はいいという理屈はつかない。これは、詳細は忘れたが、国かどこから出た文書をすごく狭く解釈しているだけ。NPO法人で地域のために頑張ってるのがダメだということは無い。

本業をきちんとやっている以上、例えば単純にお金を稼ぐために、店とかどこかの工場で働いているということではなく、地域貢献は良いんじゃないかと。今の基準みたいなのは正直古い。農業とか不動産収入以外をやったらダメという理由は、今の時代には無い。

鳥取県知事 平井：

小紫市長のおっしゃった通り、解釈で除かれている分野がある。その辺は、首長会議として、運用をこうしていくとか、立法を求めるとか、そういった要素がある。

北海道東神楽町長 山本進：

サミットの冒頭に義経桜太鼓を披露したが、今回出演しているメンバーの半分以上は役場の職員。こういう地域活動をやっていく上で、役場の職員は必要。また職員も、それをしっかり受け止めている。そうした中でやっぱり報酬の問題は出てこないわけではない。無償で、心から地域の為にやっていることは確かに美しいが、それだけじゃ割り切れない部分も出て来る。その狭間の中でどうするか。

その意味では『副業』という言葉をやめたら良いと思えてきた。

「報酬をもらうことは副業だ」という言い方はあるかもしれないが、『公務員がそういう方面を目指すのか』ということでは無く、「地域に出ていろんな活動をしよ」ということをメインにする意味では『副業』という言葉じゃないほうが良い。

鳥取県知事 平井：

山本町長からご指摘があったが、小紫市長も副業という言葉を使っているわけではなく、営利企業の従事制限を除外するのを定義化するということだ。だから副業という言葉は確かに誤解を招くのかもしれない。その他はいかがか。

岐阜県飛騨市長 都竹淳也：

報酬を得ている、自分でやっている団体で収入を得ることはそもそも良いのかという話であるが、先ほど平井知事も言われたとおり、やはりまず地方公務員法 38 条の解釈をしっかりと押さえて議論すべきであると思う。私も県職員時代に、いろいろな形で講演を頼まれることがあり、その都度人事課と協議した。当時の岐阜県庁は、今もそうだが、雇用関係にならなければ協議には該当しないと捉えていた。逆に、雇われるということが無ければ、例えば自分で小説を書いて報酬を得るとか、先ほどの不動産で収入を上げるということもある。また、講演報酬をもらうというもある。私も飛騨市で同じ考え方を取っている。どこかに社員として従事するとか、会社に雇われるということが無ければ、収入になったとしても問題が無いのではないかという考え方。出向や派遣して雇用関係になるということは当然、職務専念義務免除になるからこれは別の話になる。公務員をやっているがどこかに雇用されるという人は通常考えられないので、実はそんなに問題にしていないということだ。報酬というのいろいろな形があって、私どもの町も例えば土地改良組合の組合長らも市の職員が無報酬でやっている。区長もやっぱり報酬が出ていない。特に何も問題にしたことが無いし、問題にしようという議論すら起こらないので、そのままやっている。ただ人事担当との間ではメルクマールだけは立てておこうということで個別の議論をしている。

私自身も『鶏ちゃん合衆国』を今もやっているが、私は現職の国務長官である。実はこの前 5 周年だったが、5 年間で 100 万たまった。これを営利と言うのかどうかだが、やっぱり貯金は貯まる。しかも雇われているわけでは無く自分で主催して自分でやっているわけであるからそういうのをどう見るかという時に、理論武装をする、理論を与えてやるというのも一つの支援じゃないかと思う。それはこういう理屈で、地方公務員法上のこういう解釈で問題無いよという理屈を与えてあげるのも良い支援ではないかと思う。自分が県職員時代は何となく自分で切り抜けていたが、組織として良いアドバイスがあればありがたかったなと思ったことは

ある。そういう規定を決めるということもあるだろう。解釈はこうだよということを教えてあげるといふか、アドバイスしてあげるのもいい支援ではないかなと思う。

鳥取県知事 平井：

雇用関係ですっぱり割るということも確かにあると思う。例えば NPO 法人などに理事として入るということは結構出て来ている。中には NPO であっても収益を若干上げてそれを実費弁償的にでも分けるということもあり得るようになってきたので、最近こうやって問題になってきて、顕在化してきたんじゃないかなと思う。実はアメリカ等海外を見ると、本来の仕事以外で NPO などで公益の為に活動していることが、社会的なステータスであり責務であるというように考えられている。ところが日本の標準はそうになっていなくて、一つの場に居たら他の場には属さないというようなモットーから始まっているのが公務員法各記ではないかと思う。フランスでは、公務員であっても国会議員に立候補できる。落ちたらまた公務員に戻れる。そういうように保障している国もあるわけで、日本がちょっとリジッドに過ぎるんじゃないかと思う。だから解釈で少し緩やかにしないと実態に合わない。その辺を塩梅しながら進めてきたが、いよいよ限界に来たというのが今の状況かもしれない。

千葉県山武市長 椎名千収：

先日、全国市長会でもこの話が出て初めてそういうことを考えることになった。地方はこれから市役所の職員も市長や議員も成り手がなくなって来ると言われている。多様な、マルチな能力を持った方に公務員になっていただくか、マルチな能力を持った公務員に別の形で地域のさらなる活力を出す活動をしてもらうか。人口が減っていく中で、非常に有能な方、多能な方の活躍をこれから引き出していくという面から考えていく必要もあるのかなと考えた。そういった意味では調査していくのが良いと思う。今の市長がやられていることをしたいなと思った次第である。

鳥取県知事 平井：

椎名市長にしても、新しい視点で考えるということ。むしろ今、人材が公務労働の中で少ない。そういう意味では外の警戒を少し外していくという意味で、この兼職制度を積極的に活用していくという面もあるわけで、そうすると一定のルールが必要になってくるということだと思う。

千葉県神崎町長 石橋輝一：

知事から、身分の保障の代わりに公務員は規制もあるというお話があったが、今まで私もこういう面で悩むことがあった。今日参加している職員で、全国で講師として町おこしの体験を発表しているが、「私は無報酬で歩くんだよ」という報告を受けている。最低交通費と資料代は貰えばいいんじゃないかという話をしているが。副業と言わないで、そういう職員は一等級 4 分の 1 でも給料を実質的に上げている。そのような対応で今はやっている。今日のお話を聞いて再度地元に戻って、町民の感情とか議会の問題を如何に乗り切っていくか。当然、他の職員の妬みも出てくるということもある。総合的にどう判断すべきか、今日勉強させていただきたい。

鳥取県知事 平井：

石橋町長は事例もあって、随分思い切った工夫をされていると思う。いろいろと未開拓の分野である。そこに小紫市長が最初に踏み込まれたということで、せっかくの問題提起でもあるので、法律の解釈だとか運用も含めてちょっと整理させていただき、この制度はこういうふうにやれば更に良い方向へ使えるぞということも今後研究させていただければと思う。今日は、フロアにその対象になっている職員の皆さんも沢山いらっしゃるし、本当は儲かるのに儲からないということで、ただ回っているだけの方もいらっしゃる。せっかくなので、実際にこういうことで困っていると、本当はこうだったらいいのになということがあれば教えていただきたい。

千葉県神崎町 まちづくり課 澤田：

今、町長の本当にありがたいお言葉を後ろで聞いていて胸がいっぱいになった。

ありがたいことに全国の方に呼んでいただいて、町おこしのお話とか、発酵の里の PR をさせていただくのだが、依頼文を頂いて講師謝礼、例えば 2 万円とか書いてあるが、それはお断りして交通費だけでということにしている。それを決裁に回すと「1 時間半で 2 万円か。儲かっていいな」と言う職員もいる。いや、違うんですよ。やっぱり人前でお話する 90 分があったら、その為の準備というのは 10 倍 20 倍、本を読んだりいろんな方の講演会へ行って勉強したりとか、それまでに繋がる時間というのを沢山割いている。そして今年 4 月から、道の駅で発酵体験ができる講座を月に 1 回始めた。それは有料であるが土日出勤ということで私は代休を頂いて対応している。やはりこの講座をやるということは、自分もどなたかの講座に行くと、必ずしも土日やるわけではないので平日にお休みをいただいて、講座料金 4500 円や 6000 円を自分で支払ってそこで勉強して講座をやらせていただく。でも皆さんはそういうことを知らないで、「あ、儲けてるんだ」みたいに言われることもある。やっぱり最後に行きつくところは、「本業をしっかりやればいいんだよ」と言われる。それに対してどう答えていいかわからないというところで、「分かりました」ということになってしまう。本業をきちんとやればいいんだよと言われるが、「私やってないんですか？」と。本業をちゃんとやっていなくて、地域にも飛び出していない方もいるじゃないですか！（笑）。といろいろと考えているところです。

鳥取県知事 平井：

そのとおり。皆が言いたくても言えないことをよくぞ発言していただいた。

澤田さんのような方が活躍しやすいように。今、発酵はもの凄くブームである。変な気兼ねをしてそういった芽を摘んでしまって、かえって社会全体の発展、特産品振興などの芽を摘んでしまうことになるわけである。もうちょっとおらかに活動できるようにした方が良いと思う。ここに集まっている皆さんは異存がないところだろうから、具体的にどうやって今の澤田さんのような方を支援していけるのか、ここからもう一踏ん張り、勉強させていただきたいと思う。

ちょうど前半の時間が経過したところなので、ここから後半とする。兼業禁止、営利企業従事制限だけでなく、例えば前回のサミットで意見が出た研修、皆で寄り合う場をブロックごとに持つなど、いろんなアイデアが前回までに出ている。今後に向けて、改めて皆さんのご意見をいただければと思う。

では、これまでやってきた状況等について、事務局から説明をお願いする。

事務局（鳥取県庁 福田）：

前回のサミットで、飛び出したいけれど飛び出せないという飛び公予備軍の方のお話を聞きながら首長さん達のご意見も伺った。その中で、今後の課題として大きく2つあった。1つは首長連合の仲間、会員を増やしていこうということ。そしてもう1つは、ブロックごとの研修・実践交流・発表の場、こういったものを作っていけば良いんじゃないかということであった。まず会員拡大については、事務局としてはフェイスブックのページを開設した。理想としては、首長さん達のメッセージ・思いをどんどん発信していくことによってもっと会員を増やしていけないかということであったが、なかなか現状の中で言うと事務局からの発信も欠かすことはできないということもある。その辺り今日もお話をさせていただいて、首長さん達も巻き込みながら発信していただくという形で決めていきたい。もうしばらくバージョンアップするのをお待ちいただきたいと思います。

それからブロックごとの場を作るということであるが、実際にはこういったサミットをブロックごとに開催することにはスタッフにも賛否両論ばらつきがあり、難しいということもある。そういった中でどうするかだが、実際に各地を飛び回って動いている山形市の後藤さんが居るので、地域の現状を報告していただければと思う。

事務局（山形県山形市 後藤）：

私からは全国各地のOM活動、オフサイトミーティングの活動についてご報告をさせていただきたい。

ご存知の方もいらっしゃると思うが、今日椎川さんからご紹介していただいた、東北の中で自治体職員を中心とした「東北まちづくりオフサイトミーティング」、一般的には東北OMと言われているオフサイトのグループがある。私はその東北OMの3人いる発起人の中の1人。ちなみにその3人で始めた活動が今メンバー900名以上になっており、ちょうど先月も130人位集めて北秋田で勉強会しているし、来月も仙台で開催させていただく。

この東北OMは、よく東日本大震災をきっかけに出来たのかと言われるが、実はそうではなく、その2年前の2009年に立ち上がったネットワークである。自治体職員が中心となって開催した勉強会などを通して、NPOや大学関係者なども入っていただき、そういった活動を通してメンバー同士の信頼関係が出来ていたので、東日本大震災以降様々な活動ができたのかなと思っている。

具体的な活動は、数か月に一度の割合で勉強会を開催したり、復興支援のイベント等を開催したり、また、そのような動きのある活動だけではなくフェイスブックやメーリングリスト等を使って情報交換も行っている。そうした東北の活動がいろいろな地域の方々に評判が広がり、九州や四国等からも参加していただいってどんどん輪が広がっていった。その広がりによって、九州の方では九州OM、四国の方では四国OMなどのネットワークが各地方ごとに出来ているという状況である。

最近の活動のひとつの特徴としては、大きな枠組みからちょっとコンパクトになってきていて、今日千葉県の方から沢山来ていただいているが、チーム千葉県とか越後OMとか茨城レボリューションとか、そういった都道府県単位のネットワークが最近出てきている。先月も、とちのきOMという栃木県のネットワークも新しく出来た。そういったいろいろなネットワークが出来ているところで、広域的な枠組みから都道府県単位の枠組み、もっと小さいものだと東京都内多摩地方の多摩OMとか、そういったものまで出来ている。

いろいろあるOMのグループが、この飛び公を応援する首長の方々と連携することによって、飛び公を広げて

いく受け皿になるのではないかと私は考えている。

鳥取県知事 平井：

それでは、今のネットワークの状況の報告があったが、いかがか。ここからは皆さんから自由にご意見いただければと思う。

生駒市長 小紫：

さっき澤田さんがおっしゃっていたことで私は一番苦しんでいる。いわゆる上司という首長が飛び出すことを応援していても、毎日顔を合わせるミドル層・仲間達が応援してくれないというところは、どうクリアされているのかなと。

僕もトップダウンとボトムアップがあれば組織は回るかなと思っていたが、実はミドル層というのが一番凄まじく大変なのかなとずっと思っている。ミドル層でも凄く面白い人もいる。例えば 10 年前に当時若手と呼ばれていた人達が今ミドルになっていて、僕は毎日背中を押して応援してあげているミドルになっているのかとか。「地域に飛び出す公務員を応援するミドル連合」、「地域に飛び出す公務員でありつつ、部下を応援するミドル連合」みたいなそういうのがあれば良いのかと。

生駒市も今若い子の採用に力を入れていて、毎年 1000 人位受験してくれるので凄く元気な子が出てくるが、毎日会うのは僕じゃなくてミドル層だと。上司はなかなか飛び出すとか、私の力不足なのだが、理解してくれない人もいる。やっぱり 1000 人から選抜した子達は優秀で、いつでも辞めちゃう。辞めても食っていけるというその辺のジレンマが実はうちにはある。各先輩や首長さん方、若手が地域に飛び出すことを応援するミドルをどう育てているのか教えていただければとても助かる。結構切実な課題である。

飛騨市長 都竹：

今後この首長連合として何ができれば良いかだが、とにかく沢山掘り起こしをしたい。掘り起こした人達が全国の変った人達とお互いに知り合って、年に一度でもこうやってまた会えるというのは凄いこと。かつて全国の自治体職員が集まる場は東京での会議など結構あったが、最近は本当に少ない。横の繋がりが極めて少ないと思う。そういう意味でも、今は昔以上に、一回会うとずっと繋がりが持てる。一回会ったことの効果が前よりも数十倍・数百倍になっていると考えると、機会を作ってあげたいという強い思いがある。

それで去年、ブロック単位で会を開いてという話もさせてもらったが、実際の運営からするとなかなか難しさもあるとのこと。では、せめて掘り起こすこと、継続的に紹介してあげられるような仕組みがあっても良いのではないかなと思う。

私が職員時代にアナザーライフというサイトでインタビューがあった。いろんな人達のドラマが毎週 1 回位取り上げられていて、インタビュー記事がサイトに載っていく。それはスカイプで取材して、写真は自分で撮ったものとかを出して作ってもらう。近ければ撮影に行くこともあるという。

例えば、自薦他薦含めてこの人を取り上げたいと。アワードの時だけにエントリーすることもあるが、ちょっと躊躇しているけれど是非紹介してあげたいなという人達を取り上げる。書き手のボランティアを募ってスカイプでインタビューをして、そんな風に掘り起こして紹介していくというような。SNS でもいいし、別のサイトを立ち

上げてもいい。そういうことをずっと続けて、そういう人達が年に 1 回のサミットに集まって一緒に飲もうよという形になれば、凄くいいんじゃないかと思う。

なるべく事務局に負担のかからない形で、書き手のボランティアだけでももっと増やすことは出来るんじゃないかなと僕は思っている。

もうひとつ言えるのは、去年もそうだったが、職員を職員研修として出張で参加させて欲しい。とりあえず今回飛騨市は 3 人だが、できるだけ首長連合のメンバーの自治体で、できれば予算を取って何人でも「出張でいいよ」と参加させてあげるとするのは、機会づくりとしては凄く良いと思う。別にこれが選挙の争点になるようなことはないし、私くらいの小さい自治体でも全然余裕でできるから、そんなことを広げていったらいいんじゃないかと思う。

南陽市長 白岩：

繋がりができるように促進してあげるというやり方について、その職員さんがどういう分野で自分の熱意や情熱を発揮したいかというそれぞれのジャンルがあると思う。一旦ここに来てもらえればいろんなジャンルの方と繋がれるが、そこに来るまでの間にこういうジャンルでこういう素晴らしい成果を出している人がいるという、そのジャンルごとの今までの積み上げた事例等があると大変良いかなと思った。そういう意味で、先ほど全体の会議が始まる前に首長の打ち合わせの中で「アワードでいろんな賞があってもいいよね」みたいな話があった。そういうジャンルごとに整理した先進的な事例集のようなものがあれば、職員の方の参考になり、そして自分を一步踏み出させる後押しになるのかなと思った。

あと、究極の公務員を応援する方法としては、やっぱり我々は政治家なので、法律がもし障害になっているのであれば、最終的には法律を改正すること。そういう動きをしていくというのも、ひとつのあり方だろうなと思った。

鳥取県知事 平井：

今、南陽市の白岩市長さんから 5 点あった。飛騨市長都竹さんもおっしゃったが、来年のアワードについては点数化せずに、細かい仕事だけと凄いなあとか、町おこしでこれはパワーが出るなとか、あるいは伝統産業だとか、それぞれあると思う。そういうことでアワードを組んだらどうかという提案があった。それでよろしいか。ではそれを前提にしてジャンルごとに人材や事業のリストアップも同時進行で作業して進めさせていただく。

東神楽町長 山本：

先ほど都竹市長から集まる機会が減ったんじゃないかというお話は、僕も同感。北海道では自治体職員が土曜講座をしていた時代があった。平成 7 年からだが、北大もしくは町村会を中心として土曜日に全道から集まって勉強会をした。それが地域ごとに勉強会を作って毎月 1 回やったり様々な集まりがあったが、最近意外とないなと思っている。

集まるとやっぱり違う。先ほどの後藤さんのお話にもあったが、今回この首長サミットに全国から 100 名以上の方がお集まりいただいた。その中で話したり、酒も入り、「皆頑張っているね。もっと頑張ろうよ」と、この場で確かめ合えるというのはこのサミットをやる大きな意味だと思っている。毎年会って、ひとつ歳を取ったけれどもま

だ頑張っている。よしお互いにまだまだ頑張ろうよ！と思えること。その意味ではやはり来年もまた続けていくことが本当に大事だと思っている。こういった人達が集まることを僕達ももっと支援していくことが一つ大きなことなんだろうと思う。

鳥取県知事 平井：

ネットワーキングもしっかりやっていこうということである。確かに、いつからか飲み会も含めて公務員の世界からなんだか追放されるかのごとく急減していった気もする。それが分断を生んで、せっかくの人材育成も図られなくなったのかもしれない。

山武市長 椎名：

先ほどチーム千葉というお話をいただいた。4・5 ページの名簿を見せていただいたが、千葉県が意外と多い。私も首長に「OM に入ってください」と声かけはしている。しかし最終的には飛び公の皆さんがアタックして入ってくれた。こういうふうに応援する首長を増やすということもメンバーを増やすことに繋がっていくし、首長も増えると会費にも繋がる（笑）。そういった面で我々も声をかけていきたいと思う。また地域で仲間が増えればその地域のみでも活動の計画ができるので、地域ごとにメンバーで声をかけていくということもやっていきたいと思う。

それとうちの市では月に 1 回、6 時から 7 時半まで職員の研修会を行っている。澤田さんにも来ていただいていた。お話をさせていただいた。一番最初、この職員研修会というのは他の自治体でも市民でも誰でも参加できますよという活動をしていた。最近は外から来ていただくことが減多になくなってしまって、非常に閉鎖的になってしまった。先ほどのお話で「そうだ、もっと沢山いろんな所から来ていただいたことがあったな」と、ふと思いついた。出来るだけ多くいろいろなことをやっていくことが必要だと思った。

鳥取県知事 平井：

是非皆さんでもお声がけをしていただいて仲間を増やしていこう。これが公務員の皆様の働きやすさ、活動しやすさにも繋がると思う。

大府市長 岡村：

首長連合の仲間を増やすことをしたらどうかと思っている。

今様々なテーマでこういった連合体がある。健康都市とか、平和問題とか。首長さんもどの連合に入ろうか迷われる。興味あるところ全てに入っていると僕は身が持たないので、どうしても絞る傾向にある。そういった意味で、やっぱりこういった連合に発信力や魅力があるといいのかなと思う。例えば、先ほどご意見が出たが、今日のテーマの有償ボランティア等についての見解を纏めてそれを発信する、あるいは公開する、国に要望するとか、そういうことをもうひとつの活動としてこれからやっていけば良いのかなと思う。特に、知事さんが入っていて、市長が入っていて、町長が入っている。こういった連合はそんなになんないと思う。これは素晴らしい連合体だと思うので、是非そういったところも出していければいいと思う。

それから、先ほどの職員出張の話についても、連合の方から各首長に文書等で要請するなど、そのようにやっ

ていけば少しはこちらの会議に出やすくなるのかなと思っている。

昨年アワードで、愛知県豊明市の職員から空き家の関係で発表していただいた。私もその話を聞いて大変感動して、今年はその職員を講師として市役所に呼び講演をしていただく。そういうこともしている。

鳥取県知事 平井：

岡村市長からもご提案をいただいた。先ほど南陽市長白岩さんからもお話があったが、兼業禁止あるいはNPOの従事制限について論点を整理させていただいた上で、要請活動として、こういうことが考えられるのではないかと原案を作った上で皆様にお諮りをさせていただきたいと思う。

また出張の件も、確かに文書がないと役所は動かないので、振出人の方で文書を出して、出張などの便宜を図ってくれといういわゆる便宜供与依頼をするのもひとつの手かなと思う。またこれも事務局と相談させていただきたい。

神崎町職員 澤田：

先ほどミドル層ということでお話があったが、我が課長が一言……。

千葉県神崎町 まちづくり課 課長 佐藤：

うちの方は、飛び公の話は庁議の中で毎回言っている。理解してくれる方がほぼいない。まちづくり課の中の職員はほぼ理解して、北海道雪が大変だよとか、頑張ってきてくださいという職員の声かけもある。課長達は頭が固いのかわからないけれど、毎月のように庁議の中ではこういった話をして、仲間を募っていきたいと考えている。

鳥取県知事 平井：

こういう守り神がいれば、話が早く済むということで、そのことを是非生駒市にお伝えいただくように（笑）、お願いを申し上げたいと思う。

三重県庁 山路：

一般職員の決裁や人事の権限を持っている立場から言わせていただくと、首長さんが応援してくれるのは非常にありがたいが、ただそこは諸刃の刃みたいなのところがある。虎の威を借りるといふか、「首長が認めているんだから所属長だって認めてよ」となると、変に課長さんも「なんであれだけ特別扱いすんねん」と悩まれる。その上に出張で旅費を付けていただくと、これはまた非常にありがたいが、そこもまた微妙なところがあって、それを貰うことによって、またちょっと妬みを買う。妬みというのは女偏でなく男偏だという話もあるが（笑）、非常に悩ましいところがある。非常にありがたい。

私自身としては、職員の決裁をする立場にあるので、今の業務に関係なくても、将来のキャリアになるんだったら是非行ってこいよという形でやっているが、そこを首長がOKされてしまうと、そういう職員を抱えて実際に許認可を出す方が悩まれると思う。ある首長さんに、山路さんみたいな職員ばかりだったら困ると言われた

ことがあったので。

もう 1 点。公務員の天下りの問題で、高級な退職金を得て渡り歩くのは論外であるが、実際問題税金でキャリアを醸成したら、それをまた民間で活かせないというのはもったいないと思う。という考えでいくと、公務員の方が純粹営利というのは殆ど考えられないと思うので、自分の担当じゃなくても地域自治体の仕事である以上当然そのノウハウ、能力を発揮して、尚且つ報酬については旅費とか実費負担は認められて然るべきじゃないかと、現場感覚としては思う。

一般参加者：

今日の会議の趣旨とは合わないかもしれないが、私は一般の市民の協力をどのようにして取り付けるかということも、少し首長さんにもお考えいただけたらどうかと思って聞いていた。

実は私、酒々井町から来ていて、去年皆さんに酒々井町まで来ていただいた。私も是非参加したいなと思っていたのが、たまたま海外出張で参加できなかった。私と一緒に市民活動している人達に参加したのかと聞いたら、私の近くでは参加した人が誰もいなかった。今日この会に参加させて頂いて、皆さんの意気に触れて大変心強く思っております。せっかくのこういった機会なので、市民にも積極的に参加していただいて皆さんの思いを知って貰い、市民の協力を取り付けることもどうかと思う。逆にお聞きたいが、私達市民がどのような形で、強い志を持って活躍されている、ここに参加されているような職員の方々に協力させてもらったらいいかということも、この際ちょっとお聞きできればなと思う。

釧路市長 蝦名：

前回の時に会員拡大が大きな課題だったと。私の場合、大越さんがアワードを取って市役所の職員から議員になった。そして山本町長が高校の後輩だと分かったということで、私は議員と後輩に弱いのかなと思う。やっぱり強みのあるところから声をかけていくしかないんだろうなという感じがする。

大越議員は職員の時も滅茶苦茶飛び跳ねていた方で、仕事もやりながら活動を進めていると同僚は認めている。しかし上司は「あいつは」となる。やっぱりどこの社会でも一緒に、組織というものは波風立たない決まったところでやっていけばいいという感覚の方が非常に強い。そうすると今度は地方自治体としてどうなんだという議論はある。ここをなんとかしないといけないよなという感じである。

市役所も昔は職員が勉強会を作っていて、びっくりしたのが「アダム・スミスの原書を読む会」とかあった。そういうことをやっていた人達が仕事の中でも極めて活躍されているということである。

あと、私どもの町の中に大学があって、そこで社会人のゼミをやってくれる。そこに公務員が入ったり、釧路市のみならず周りの町村の方も入ったり、一般の市民の方も入ったりして、いろんな勉強会を作っている。

例えば自分の町の「財政」みたいなテーマを決めて白書を作るぞーなんて話をしたときに、市民の方とか市の入職 1 年 2 年目の職員がそこに入っているのと勉強をしている。「どうしてそこに入っているの」と聞いたら「普段の業務では刺激がないし、初心を忘れないようにこういった勉強会に入っています」という。

だからそういった意味で、交流する場面を作るというのは有りなのかなと。そういった場面に職員を送りながらいろんな刺激を与えていくというやり方もある。昔釧路市では、誰が指示したわけではないが、そうやって進めてきた人達がいたということを紹介させていただいた。

神崎町長 石橋：

今お話を聞いて非常に参考になった。よく「出る杭は打たれる」と言うが、その杭を打つ連中と言うか、表現が悪いが、それをどういろんな押さえ方をするか、理解してもらえるのかというのが、今私自身が悩んでいる。よく「職員が変われば町が変わる」と言うが、公務員の視点を変えるというのは至難の業だなと今つくづく感じている。今皆さんから聞いたお話を参考にしながら、また町へ帰ってから職員の再教育をしたいなと思っている。

木城町長 半渡：

今回は本当に気づくことが沢山あって勉強になった。やっぱり「職員が変われば役場が変わる。役所が変われば町が変わる」という思いがある。私達首長は相手の信念というか、思いを持って変えていく。またそれをサポートしていく、応援していく、後押しをしていくことは大切だなと改めて今日気づかされた。大変勉強になった。

鳥取県知事 平井：

一通り皆さんの方からご意見が出た。若干フォローさせていただきたいと思うが、先程、千葉県酒々井町の方のお話があったが、おそらく今我々がやらなければいけないのは、住民の皆さんと行政、このパートナーシップを組み替えるという事だと思う。そういう意味で、是非、忌憚のないご意見をいただくのが役所を変えていく事になると思う。また、役所側から住民の皆さんと一生懸命関係性を作って、それをやろうとして奮闘している人達がいる。これを支えて頂けると結構意気に感じて、周りの目線を打破して行こうというエネルギーにもなるので、応援をして頂ければありがたいというのが、私達の気持ちである。

また、出張の扱いはそれぞれの状況に応じて工夫をして頂ければ良いのではないかなと思う。そういう仕組みを要求している市町村もお有りのようなので、一応そうした便宜供与みたいな文書を付けて、後は受け手の方に解釈してもらって、それを使うか、何かの任意でやってもらうか、それはそういう風にして頂ければと思う。

今日いろいろなお話が出て来たが、一番大きな話はもう一度ネットワークを作り直して、職員が蛸壺にならないように。そして幅広い住民の皆様との団結も含めて体現できるように、それをやっぱりリーダーシップを取って我々はやっていこうというのが大きな 1 つの塊のお話であったと思う。是非、次回に向けて、フォローさせていただく必要があると思う。

また、せっかく首長で集まるのだから、法改正など国の方に制度として求めて、我々としての姿勢もきちんと世の中に見せて、いろんなものを変えていこうと、こういう力強いご意見もあった。これも、早速取りかかって行きたい。その他、例えば先程の兼業禁止の問題であるとか、ちょっと宿題として残った事もあって、この辺もフォローしながらまた次回に繋げていければと思う。

今日、こうして皆様の様々なご意見を頂いて、一通りこの東神楽における会合は、上手くまとまりかけたなと思う。ただ、次回続けるためには、次回やっていただくところがなければいけないわけであって、是非次をというところは、この際お申し出をいただければありがたい。

(飛騨市長 都竹市長が開催地に立候補)

(会場拍手)

異議なしと認める。それでは、飛騨市長の方から次回飛騨に向けての決意を。

飛騨市長 都竹：

次回は、岐阜県飛騨市の方で開催させていただきたいと思う。飛騨市は岐阜県で一番北になる。飛騨高山から列車で 18 分。名古屋から来るとだいたい 2 時間。富山から来ると特急で 1 時間 10 分になるが、富山高山間の特急は少ないから、どちらを取られるかという事になる。東京からは最短で 3 時間 40 分。今までのサミットは 11 月か 1 月ぐらいだが、1 月になると先程話にあった通り豪雪地帯なので、多分ディスカッションは雪かきになる。雪かきにしないためには、11 月を軸に検討させていただきたいと思っている。

岐阜県内で肥育された A4、A5 級の牛を飛騨牛と言うが、実は岐阜県内という事がミソで、宮崎から買って来て、養老町で育てても飛騨牛となる。だが私どもの町は、飛騨市生まれ飛騨市育ちの飛騨市完結牛をたくさん扱っている。来年は是非、正真正銘の飛騨牛でおもてなしをさせていただきたい。

ちょっと遠出になるが、私どもの町は鳥取県平井知事さんのお話にもあったように、神岡鉱山という所がある。神岡鉱山が休鉱になり、その跡を使ってスーパーカミオカンデというニュートリノの観測施設がある。ノーベル賞の小柴先生と梶田先生の二人を輩出しており、最近では重力波の望遠鏡の観測施設ができている。普通入れない所だが、特別に入れるような許可をいただくツアーなんかも考えている。

神岡鉄道の廃線を自転車で行く、レールマウンテンバイクガッタンゴーというアトラクションもある。飛騨市の古川はユネスコ無形文化遺産の 33 の一つに登録された古川祭がある。町の案内は私がしたいと思う。私、ボランティアガイドに登録していて、月に 1 回ぐらいガイドをしている。私が是非ご案内させていただく。来年は全力でおもてなしをさせていただくのでよろしくお願いしたい。

鳥取県知事 平井：

それでは、飛騨市長都竹市長の所へ“続く”という事で、終わりにさせていただきたいと思う。「面白きこともなき世を面白く」と高杉晋作は言ったが、明治維新から 150 年、私達は志有る志士をこれからどんどん作って行きたいと思う。本当にご協力ありがとうございました。